
紫光

猫離脱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫光

【著者名】

ZZマーク

N9700G

【作者名】

猫離脱

【あらすじ】

紫の光を求めてぼくは旅だった。途中でみちづれを拾つことになるのだが。

「最近酒はあまり飲んでいなくてね」

グラスを傾ける。

「飲んでも楽しくないんだ」
また傾いた。滴がまぶしい。

「飲んでも酔わないし」

もう一口。「一スターにそつと置く。

「それでその理由に最近気づいたんだ」と、その男は私を見つめるのだった。

どんなつもりかわからない。口説こうとしているのかただそれについて話したいだけなのか、私は友人に聞いた話を思い浮かべ何とはなしにわかるわと言った。

「わたしもそう」

「理由も同じかも」

男の眼を見返したが反応は良くない。ぼやっと消え入りそうな瞳の光。

口説くつもりは無い。それならば、と私もグラスをもらい傾けた。どうしたわけかお店は暇だった。数人の予約組がキャンセルになり男が一人入ってきた。店では何度か見かけた客の一人だったが一人で来るのは初めてだ。目が合った私が接客した。お久しぶり、今日はひとり、私のこと覚えてる等々一通りの挨拶は済み忙しくもなれば別なのだがこれから会話をどうもつていこうかと思つて矢先だった。

とにかく、今日は飲ませるだけ飲ませて話を聞いてやつてモードなわけでそれで何とかなるでしょのパターンだった。私はお酒は弱くないしたいていの男は話にならない。仕事でたらふく飲んでまた仕

事抜きでお酒を飲みに別のお店に寄として繰り出すこともたまにあ
る。それと同じだ。それでいこう。他に寄もないし、騒ぐような
客にも見えない。まつたりじきましょつか今宵は。

2

その女はあゆみといった。店には何度か来ているから何度か見かけ
ている。席に着いたこともあった。どんないい女でもどうしようも
ないとことがあってたとえばその女の家族の顔を知ってるとか友人
の誰かに似ているとかそういう場合だ。で、あゆみはその後者の例
に当たった。昔のことを考えていたからに違いない。そしてその眼
にであった。ああ久しぶりだよまつたく。ここまで遡るとは思わな
かった。

ちょっと仕事が立て込んでいて一人でそれをこなしふらふらしながら会社を出て昔のように勢いに任せ何かにすがるものもない。さつと集まるような友人もなく、気軽に煙草をふかせて飲みができるみにまぎれるような所に行きたかった。カウンターでよかつた。がやがやざわつていているところで影になっていたかった。そういう客をみていたからその役に今日は自分がなるのだ。

ドアを開けた。

ボックス席が与えられた。

ビニールのソファにうずまり顔を拭いた。

あいつと向き合つてるみたいだった。

弔辞とやらを読ませたもんだった。読まされたのだあれは。心な
い言葉が自分の声で聞こえてくる。何が何だかわからないまま事が
行われて閉幕だった。どっからだつたかここまで、この眼にたどり
着くまで。

3

強要されるのは好きではないがカラオケを歌う程度ならできる。それも仕事のうちよと店のママが言つたのを覚えてる。そのときははあつとうなずいたわけでそんな機会は訪れなかつた。彼は歌つてゐる私を気付かれないように見ていた。私と彼の二人なのだからそつなるようまできているのだが何かこの歌に思い入れがあるのだろうか。昔の彼女が好きだつたとかいうのかしら。少し前にはやつたセンチなナンバーは私も覚えてる。そのころはここにいなくて何してたつけ、カラオケ屋でバイト?いやそれとももつと前、もつと昔、だいぶ昔。

彼のグラスが空になつた。歌が終わつた。お酒を注いだ。黙つて飲むなんてしんみりは好きじやない。今日のお店の感じ何か変。周りを見わたす。みんな何をやつてるの、お箸は、今、何時。ここはそういうのを忘れるところなのに何ががそつこうのが思ひ出されるよう押し流されてくる。

私は私の身の上話をした。この歌がはやつていてから今までの全部を話した。いつもよりも複雑に正直に話した。だから一気に全部話してやつた。

酒か女か昔の武勇伝、今の仕事の辛さ、将来の夢、ちょっとした旅の話、誰かの近況に自分に家庭があればその話、あるいはペツト。最近見たテレビドラマの話に歌謡曲、雑誌で立ち読みした心理テスト、そんなことを何度も話してどうするんだろう。毎回違う女に同じことあるいは酔つてくればお構いなし、またその話なんていわれるのも少々。

とにかく酔つて早く酔つてそれと一緒にそれらの話の最後までいつて終わらせて何かを出しつくして向かい合いたいんだりう。いやだつた。見たくないを見てきたのを後悔してこる。やりた

くないことをやっているのをみとめたくない。投げ出してしまつんだ。

日本人は信仰がなくてやーよなんてどこかの学生風情が言つたのを思い出す。

そうだ破壊は神だ。破壊を信仰するんだ。

希望と未来と絶望と幸福といろんなプラスとマイナスを計算して折り合わなくなつたら破壊するんだ。

「それで」何がそれでかわしらない。

「番号は

「アドレス教えてよ」

誰の声が言つてんだろうか。

5

はいはいはい。どうぞ、お店のだけどね、いいよ。こんな私でよしければ、またお店に来てよね、お仕事がんばって。
どうしようもない人、酔わないなんていつてだらしがない。もうおしまいなのね。

どう、具合悪いの、大丈夫。お水もってこようか、帰りは、タクシ一呼ぶ。

遠くに声が聞こえる、私の声だ。私が見ている男。私の視覚。認識、認識、何を聞いて何を思つて、時間は、今、何時。何を話して何時間。ああお勘定。ありがとね、うん、また。

それからはずつーとお店が忙しくママは急ぎょ臨時でバイトの子を雇つたりわけがわからなく私も仕事に追われた。ただただお店と家の行つたり来つたりだった。

落ち着いたらボーナス出すからなんてお金はもういいから休みがほしいよが本音だった。

案の定古株の何人かが店に来なくなりしわ寄せが私にまわつて来ていた。新しいバイトは何人もすぐ入るがそれでは店の質が明らかに

落ちる。そこらの風俗でもあるまいし最低限のレベルはほしい。ママは参つていった。手が回らないのが実状で、お店の繁盛がうれしそうではなかつた。限度つてのがあるでしょう。限度が。ママ、もう無理。これ以上なら私やめます。と言つてみたが、今月まで今月までと3か月目まで続いている。どこかでだれかが下りていかなれば、蜘蛛の糸。ふと思ひ出す。蜘蛛の糸は切れてしまうんだ。

ママ、国語の教科書よ、蜘蛛の糸。習わなかつた。たとえになつてないかもしないけど、糸が切れそう。もう切りましょう。あれ、やつぱりたとえになつていなか。でもそうだ、表現としてはそよう、絶対、今日ここで今月で、糸を切りましよう。終わりにしましょ。ママ、決断してよ。

6

別に意識はしていないのだが、同じこと、同じもの、同じ時間、同じ気分を踏襲して物事を進めようとする自分がいる。

お金には無頓着だ。ある程度のものが一通りそろえばお金は貯まるばかりだ。使う暇がないと言えばそれまでだが、特にほしいものはなかつた。仕事に追われ休みの日は本当に一日寝て過ごす。水、缶コーヒー、煙草、ビール、スナック、1544円の数値に満足して帰宅して一足歩行の人間が這つて歩くようになる。仕事で考える頭は家では考へることを受け付けない。やうするとすぐに眠くなる。こうして寝て起きて仕事してもう30を過ぎた。すぎたという頃にはもうすぐ32になる。ああ年を覚えられないとはこのことだ。あれから何年、だから今は、何歳。そういう覚え方ができない。友人、大人の約束が増えた。果たせず会えず。落ち着いたここで一生を終えるのか。将来を考えると眠くなる。

先月からの仕事には満足だ。期限通り終わつたからそう言えるのだが、後半の自分の機転の利いた魔法の指先は圧巻だった。主任とし

ての責任を果たした。派遣の子を2人も抱え自分の下に正規社員はない。上に起案をあげて承認をもらいしばらく休んでないだろうからたまっている有休でもとつたりいと言われそのつもりですと一週間の休みをもらつた。

7

後から聞いたりよくある話でママはわかつていたんだろ?と思つ。だからあんなに頑張つて何も言わず続けていた。

ママの店はもうない。こんな小さなお店をどうにかしようなんてだ、誰が思いつくのかしら、力を試したいだけ、踏み台。ただそれだけ。むしゃくしゃしていた。

だから、それは彼のせいした。お前がなにか変にした。勝手に解釈した。女のかんだ。

呼び出した。やさしい女のふりをして、気分転換は必要だった。

和佐

かずさよ

名前。

会いましょ。うん。いま、から。

思えば私もそう、家族を捨ててきたんだ。力を試したい。実家から出たい。なぜなんだろうか考えることすらしなかった。なぜなんでしきうか、身近な人も守れずに勝手に捨てて、お店が買収されてむしゃくしゃしてなんでもうといつた感じ。

ほんとはまた一からはじめるのが怖いんだ。慣れ親しんだお店でいつまでも仕事をこなしていくかい人見つけて結婚して、子供作つて、ときどきお店の手伝いに出て、もおいいわ。

ええ、宮下公園。しつてる。そお、そー。はい。じゃあ。

7

ゆきづりの旅というものにあこがれていた。さらにわからないが駆け落ちみたいな感じがついてきて誰も乗っていない列車の特急席に向き合っていた。窓の外を眺めていてぶすつてる女の顔がちらちらになりだした。

「で、どこいくの」

「あつ。んー決めてない」

「でも、どこかむかってんでしょ」

ああそうだ。

なんでついてくんのつて言つたら別にいによつていつたじやない、か。

ああ仕事が終わつて落ち着いていい気分じやあなかつたらなにするかわからない。いろいろいらしてこんな自分に向き合おうとする女だつたらすぐに黙らせるだろう。

「でも お店が買収されたのは絶対オレのせいじや ない」

「それに大の女が小さな鞄一つ持たず見ず知らずの男の旅についてくるなんてあまりありえない」

「めんどくせえけど いうこときくんなら ついてきてもいいよ」
はつとした顔すんだろうと思つたが聞こえないふりで反応なし。

音が流れる。列車の音。きいきいきしむ機体の音。ほんとに女は鞄一つ持たない。何もんだ。こいつ。どこ行こう。それにしても、宿くらい決めとかないと。おれも荷物なしだし。

何度も行こうとしたあそこは電車で行けるのだろうか。方向はあつてている。

寝よう寝て考え方、目が覚めて女がいなくなつていればよし、女がいてもよし。

なぜだか眠くなる。仕事の心配がなくなつたせいだ。明日も休みのせいだ。日本が平和なせいだ。女が少し美人なことに気づいたせいだ。

男が目の前で寝ている。ほんとに寝ている。それだけでいらだちが解けた。トンネルをくぐつても大きく揺れても売り子がものを運んでも寝ている。男はどこまで寝ていられるんだろうと、その間私はなにを起きているんだろうとぼやつとおもつた。寝ているのも起きているのも同じ。私はしつかり起きていて男は寝ている。男は寝ながら考えようとしてもしているのか私は考えるふりをして起きている。

駅が遠い。ひと駅ひと駅が遠くなり。車内の空気も変わってきた。男はびくつとして起きた。起きたがそれきり体を動かさなかつた。状態を確認して私を意識してやつと体を起こした。

何時かなと言つたので私は時計もみずに4時くらいかなと答えて正確には4時30分だつた。

男は5時くらいで降りようかといい。私はええと答えた。

男が起きたので私はもう寝てもいいとおもつたがそれは30分かと思いやめた。

男がトイレだらう所に行き私はからからな喉にきずいた。声がかすれていて何が起きたか理解できなかつた。

牛肉を、肉だけを赤身のところの塊を食べたくて、白い小便が銀の板に輝きを広めるのを眺めて思つた。

月読ホテルというホテルは何年か前に話題になつたであろうホテルだ。当時はたぶんそうで今は落ち着いたはずだ。なぜ落ち着くのか、話題となり予約が殺到してそれでも部屋には限りがあるしそれだけ

を田舎でにくる若者はあまりいないだろう。特別な観光地でもないし年配の方は温泉宿に泊まる。ただの若者向けの雑誌の切れ端で話題と言つていいものかしれないがあの切れ端を見て當時すゞいと思つたのは自分だけではないだろう。

トイレから出てドアと「ミ」箱の隙間にしゃがみこんで携帯を取り出した。何件か中りがありこういつときはあれこれ迷うときりがないので電話番号がでているそれに直電した。

はい。ムーンテラス何とかという応答があり、そのままこちらの返事を待つている時間がわざかにあった。

名前が変わるのはよくあることでホテルがホテルとして前面に名前を押し出せなくなっているのも聞いた話ではありがちなことだつた。宿泊はできる。食事も当ホテルで。部屋もある例の部屋も予約され、最後にどうでもよいからしない。今の自分の希望をのべて終わつた。席に戻ると女は窓の外をみていた。

幾分表情がやわらいでいた。この女にかまう自分が今度はぶすった風にならなければならないのか考えた。

席に座つても女は外を見たままだつた。ガラス窓にあごのあたりを映してみていた。

「和佐」

なんて近く呼んでみた。

踏み出すまでに10分以上だらつか費やしたそれに踏み込んだら一気に状況と予定をまくしたてどうすると言つた。

駅のホームに降り立つといつも地面の感覚を確認してしまう。足もとが動かないか、どれくらいの固さか落ち着くまではきっと強く踏みしめている。

ねえ銀行、と私は久しぶりに自分で言葉をはつした気がした。

昨日の午前3時から寝ていない。眠いが眠るための準備ができるしない。たとえホテルにたどり着いても眠るわけにはいかないと普段から積み上げてきた常識の範囲内での不安がよぎった。男はあまり心配いらない。彼にまかせてもまかせなくとも地に足付けた瞬間からすることをしようと思悟がついた。

銀行、ドラッグストア、トイレ。ひと段落。

さほどのミスはない。現場、ここにはどこか、何から始めるか、男はどこに行つたか。

熱心に駅の案内板を眺めている。

私は男の後ろに黙つて立つていた。

男は幸いかんがよく後ろを振り向き消耗して少し悲壮感がでてきている影のある美しい女にむかつて歩いて15分なんて言わなかつた。これから観光でもあるまいし、ディナーかホテルかあるいは帰るかどうかだ。

タクシーで知らない街をみているのは楽しい。特別な匂いがする車内でどこにいくかは尋ねなかつた。そもそもここはどこか日本地図で見当つくほど私は地理が得意でない。

普通の女がどこまでかはしらないが、地図も読めない。

ただあまり曲がらずビルの間を通り過ぎ郊外へ出、少し私は不安になり男に何か話しかけようとしたところお金いくらあるつて男が言ったのを聞いた。

もつともな話、連れの素性が知れず頼りになるものは連れの財布の中だけかもしけない。

とりあえず5くらいはと私は言った。

オレー一週間休みなんだ。と男は日にちを数え始めた。19。20。

21。22。

7つの数字はでこなかつたけどふうんという感じだつた。

私はどこまで数字を数えるか迷つた。とりあえず男のその近くまでは数えたのだがあとは数えるのが嫌になつた。わからない。わからない。考えるのはよそう。そしてタクシーはなにか坂をぐんぐん

廻り、上つきたところで止まつた。

12

この地方は山があり海がありその間の森を切り開いて都市が作られている。目立つた川も大きな平野もなくすぐ海にたどり着くのは珍しい。海と山がコンパクトに都市を挟んでいる格好だ。まあ都市といつてもそう言えるくらいの小さな都市だが。

海は見渡せた。穏やかだった。うるさいカモメ連はいなかつた。岩場にも白い傷跡もなく魚のにおいもしなかつた。とにかく見える範囲だけの話だが漁業が盛んと言つわけでもなさそうだつた。

景觀を楽しみにきたものとしては絶好で、見えない市場から新鮮な魚介類が運ばれてくれる文句がないなどひとりごちた。

息がするというか吸いたかつた。意識して大きな呼吸をしてそれはいいものを取り入れたいねがいだつた。

ホテルの受け付けは若い女の子で正規ではなく管理を任せられた程度の印象がした。ホテルのオーナーの娘か関係者か、オーナーにとてもだが客に対しても信頼を与えてくれる程度の礼儀作法はあつた。部屋は現在は5つしか開けておらず、夜はバーになりそこをお客さんが入るのだという。

受付嬢は間が悪いからなのか話好きなのか物好きな自分たちに興味を示したのか、チェックインの受付作業をしながら一通りの説明をしてくれた。この地方の事、今は今、昔は昔の物語。

夜は下で仕事をしているので二人では是非とのことで話は終わつた。しかし女つてのは女同士の関係についてどうしてるんだろうといつも思う。

和佐はロビーのソファに腰掛け受付嬢を見ているはずだ。

受付嬢もオレと話しながら和佐を意識してゐるのだ。

「なかなかいい感じのホテルね」

それはホテルのことだよねと言いそうになつたがやめた。

あたりまえでしょなんてそつけなくいいもしないで見つめられてもあれだ。

部屋に入ると片側一面が大きな窓になつていた。波は静かに寄せて返しへットの白いシーツは漂う帆船をイメージさせた。

窓は開けたり外には出られないものの四角い前面のほかに斜めにそれは月光を入れるためにあらう天窓がしつけられてあつた。

後ろで入ってきた和佐がうわうと息をのんだのが聞こえた。

13

男は振り返りもせずホテルに入つて行つた。私はただ背中とふみだす足をみていた。タクシーに乗つてきたが信号で止まるたび眺めていた前方を走る車のようだつた。

ぶつからないように前が止まつたらとまる。いつしか前の車がいなくなつてただ一人走つていくことになるのだ。その時に私が帰える先はあるのか。

とりあえずホテルは過剰でなく貧装でもない落ち着きとセンスの均衡がとれていた。

ロビーの女の子はまるで今風でそれでもここに勤めていて対応なんかを見ているといいところのお嬢様なんだなと感じるところがあつた。平然と勤め上げているのだ。

すぐにも部屋に入りたかつた。相手のテリトリーに入りたくない。このホテルが彼女のものでないにしろなんだか自信と若さと美貌を兼ね揃えた彼女をこれ以上見る気にはならないのだ。もちろん彼女に私をねぶみなんてさせはしない。

外は穏やかだ。風の強い日もあるが今日はそうでない。雨の日もあるが今日はそうでない。日差しが強いわけでもなく、曇っているわけでもない。眼前にばか騒ぎする旅行者がいるわけでもなく何も

不満などない。穏やかで落ち着いてきれいで、私もそうなればいいのだ。私ももはやその一部をなしてどこからか問題の根をわざわざ植え付けるようなことはする必要はないのだ。

14

彼女が来る場所だつた。案内人はオレ。後ろを振り返るともなくそうかそうかとうなずいた。彼女は気づきもしない。よくあることのこれ一つ。自分はなにかの出汁につかわれている。自分でも気付かないうちにだ。たどり着いて気づく。今回はそのパターンか。こは自分が確かに来たかつた場所であるけれども彼女が来るべき場所だつた。なんだか、なんだかだ。そういうときは落ち着いて考える。そういうことに気づいたとき気分が半減する。

モチベーションを高めるために自分に与えられたものを考える。冷静な判断と公平な対価。

自分には彼女自身が与えられたと自分は判断した。対価としてそれで満足しよう。体中潤させた果実をこの手に掴むよつこじよう。

15

海が、空が、足がもつれて窓に手をついた。
肩に手を突かれてもしばらく気付かなかつた。

座ればと言われて男の存在に気がついた。少し散歩してくる。の声と共にドアが閉められた。私は振りかえりも返事もせずに空氣と共に呼吸も意識せずにはり窓に手をついた。

男が差し出してくれた籐椅子に座りふうつと本氣で息をついた。何かを思い出したような気だけがしていた。どれくらいの時がたつただろうか、男は散歩に出ると言つたが私は外には出なくともよい。

私はずっとここにこうしていたい。この窓が私を守り私を癒してくれる。フロンントに電話するとあの娘がでて、あれこれ必要なものを融通してもらえることになった。冷蔵庫から水を取り出し窓辺に置いた。水滴が生まれるさまを発見した。それで時間の間隔を取り戻した。温まつたそれを一気に半分まで飲み干してベットに仰向けになつた。眠つた。のだろう。

部屋でシャワーでも浴びたかつたが手をつける気にならなかつた。部屋をそのまま明け渡してくるのはらしさといえがらしさだつた。ふつと海岸線を歩くつもりだつたが、受付嬢に微笑まれてこの辺の歩いて回れるところなどをあらためて聞いた。少し恥ずかしんですけどといって手書きの観光案内地図を渡された。観光案内に自動販売機が載つてるのはいいね。助かるよと言つて外へ出た。坂をおりて道路を渡り、さらには階段を下りていくと砂浜に出て岩戸がある。そこから覗く夕日は絶景らしい。階段を上り道路に通じまつすぐ歩いてガードレールで一休みしてまた海岸線の道路を歩く。小さな神社に向かう階段を昇る。小さな丘のような山だが海も反対側の町も見渡せる。ただ町へは歩いて行くには遠すぎた。

小さな物売り程度の商店も無くだから自動販売機が載つている。ホテルと神社と海とがあり必要なものはホテルに「用命ください」とのこと。車の通りは少なくよくみれば街灯もない。自動販売機は神社へ登る山の階段の降り口近くにあり階段を中心に山を左右にまわりこむ道がつくられその右折左折を示す標識のための街灯が小さく灯るようだつた。夜来るのはすこし怖いかなと思いつつ販売機脇の椅子に腰かけた。なぜ販売機脇に椅子があり小さな壁と屋根がしつけられているのか疑問だつたが壁に剥ぎ取られたバス時間表の跡をつけ納得した。

夏の神社前の蝉が鳴き子供らがプールの鞄を背負いばあさんが病院に行くすがらここに腰掛ける。時に白に薄いピンクのワンピースを着た女性が日傘をさして陽炎の中立っている。

オレは廃線になったバス路線でジュークを飲んでいる。夏は行き、子らはいず、ばあさんもいつたのだろう、女性は幻、蜃気楼。

よくお休みのようでしたので「注文の品」に置いておきます。

失礼いたします。

ああそつか。眠つてしまつたんだ。いろいろ物を頼んだ挙句眠つていて面倒で身勝手な女なんて思つているかしら。シャワーを浴びて化粧をして着替えをすませてフロントに電話した。

電話は受けられた。いつでも電話番を怠らないのだろうか。ここにきて怠惰な自分と照らし合わせそんな詮索をかけてしまう。すみませんありがとうといながら、クリーニングの用事もいつけた。あつちは仕事こつちはお客様。あまりいいことではなかつたが自分に言い聞かせた。業種に違いこそあれ接客業をしていると自分が受ける側に回つた時にあれこれあらさがしをしてしまつらしい。

残りの水を飲み干した。温さはちょうどよかつた。

さて、着替えて化粧をしたものの外に出るかといえばそんな気はないのだった。男がしつらえた椅子に座りまた窓の外を眺めていた。眠りから覚めて気づいたのだが部屋に香りがついている。受付の嬢が入つていてその彼女の香ではなくはじめから薄くついた部屋の香りだ。きっと部屋の掃除と共に部屋に軽く香をたいて幾数にわたつて徐々に薄い香の膜をしいているのだ。嫌みがない行き届いた細工だ。素直になろう。ここにいる間にはあの嬢にも、この世界にも現状にも、そして男はどこまでいったのだろう。かれこれ数時間は立つのですが、電話するのもなにか野暮な感じがして思いと

どまつた。さつき素直になろうと誓つたはこうこうといひうち迷わないということではないのかなんてまたうらうら考へが堂々巡りしそうになつたのでやめた。とりあえず窓の外をみていた。椅子に座り2本目の水を手元に置きその位置が今の一一番落ち着く位置であることを確信した。

もしもし、 様の携帯でいらっしゃいますか。はい携帯ではないんですけど です。ああ、ホテルの、ええ、はい、なるほど、大丈夫ですよ、あつたぶんですけど。ええ、心配はたぶんいりません。そうでしたらお願ひいたします。ええ、いえ、こちらこそ迷惑をおかけします。

おかしな客なんだろうか。オレら一人はまあ都会じゃないから余計目立つわな。彼女さんは御病気か何かといわれると、そうかもしれないしそうでないと笑つて断言もできない。

彼女にとつていい場所かはしらないが来るべき場所とはいえるかもしけなかつた。で、オレは何かというと観光というか興味があつて、実は建築関係の仕事をしていてこのホテルの造りに興味があつてなんてとつさの嘘も思い付かない。

分を置かずホテルより電話が来る、食材の調達をしにいった車が自動販売機前に寄るのでもしよかつたら乗つていらしてくださいとのことだつた。

ディナーは何時、日の入りは何時、それによるともう30分ここで待つことになるがお願いすることにした。この山を一周しても一度神社にお参りすればちょうどいいかなというところだつた。

神社に向かつて左折。海沿いの道を歩いた。道はこの山を一周しているがそもそもなぜつという感じがした。右折でそのまま町へでられるがこの山を取り囲む道の意味がわからな

い。ただの観光用の道ならホテルからここまで来る道で十分にその意をはたせる。ぐるっと半円をかくくらうに回つたが海辺に降りる道をひとつ見つけたくらいだった。その道も漁港につなぐというのもなくただ下の浜辺におりるためのものだつたのでわざわざ行きはしなかつた。まあ、自分は地理学者でも民族学者でもないのだ、こつちが旧道で街に近いほうの道が新しく作られたんだどう。街灯もない狭い海沿いの道だ。波とか風とか強そうだし夜道路に何か落ちていて道を誤つて事故とかありそうだからこうなつたんだろう。もう半周の半分は山を背に海も見えず遠くに街が見渡せる少し日常に近い光景が広がつていた。元の神社にたどり着くとやっぱりこっちの道は必要ないよなんてまだ道についての学者的未練を残しながらそろそろホテルの車が寄る時間だったので旧バス停におとなしく腰かけていた。

車が止まつた。オレの中の旧道のほうからやつてきたとかはもう思わないでもなかつた。ワゴンは運転手一人でその男は若かつた。ホテルのお客さんと聞かれうなづくとOK乗つてとのりがよかつた。受付嬢の彼氏以外の何物でもないよな、それで後ろの積み荷を見ると料理人。視線をうろちょろさせていると、

「聞いたよ」

「えつ」

「今日のお客でしょ女つれの」

「ええ」

「オレは木下」

「受付の子見たでしょホテルの、彼女は沙希」

「言葉遣いとかはすみません、いつも彼女にいわれるんすけどね、もともとホテルのほうは来月で閉める予定だし下のバーもそこそこお客様が来るもんだからやめられないだけでいづれ、まあそっちのほうはどうするかはこれからなんですけどね」

「お客様東京から」

「ええ」

車はホテルへの坂を昇っている。

「観光でもなさそうだし誰かの紹介？」

「ああ、えー、休みが取れたんでふらつと旅行がてら電車に乗って、それで昔雑誌にここ載っていたのを思い出してそれで」

「あーあつたあつた。あのころはね、んー確かに忙しかった。あつたあつた。あれね」

「でもお客さん再取材とかじゃあないでしょ」

「いえ、ただの客です」

「沙希がさ」

車が止まつた。

話はそれきりになり、木下は裏に車回すんと去つて行つた。

玄関をくぐりロビーで沙希、が迎えてくれた。フロントには中年の男が代わりに突っ立つていて沙希はオレを見つけると手を振つて向かつてきた。

さして広くないロビーで一人座つて向き合つた。薄めの熱いコーヒーが運ばれてきた。

私の生まれた町は小さな漁港だつた。お父さんは漁師で母は近所のスーパーにパートに行つたり港に手伝いに行つたりしていた。こんな景色珍しくもなんともない。子供のころに何べんだつて見た。ここは綺麗に取り繕いすぎでほんとの海の海で生きる人たちが住む匂いがしない。ただきれいなだけだ。今の私にはそれがわかる。でも、私はこっちを選んだのだ。だつてここじゃあ生きられないものなんて生意氣いつて町を出た。友達の誰もがそうだった。あの故郷で生きている自分は想像できないのだ。あの頃はだれもがそうだ。友恵も幸恵も明子もテレビや雑誌の世界が本当の世界でそれが大部分を占めていて自分たちのいるここは墓場というか夕暮れというか

何かが始まる場所ではなかつた。特に私たちの年代はみな町を出た。進学、就職、何かにかこつけて出なければいけない場所だったのだ。たまに若くして戻ってきた人がいるといろいろ噂がなされ、近づかないように諭される小さな町だからこそ、誰も戻れない。

なんて厳しいんだらつ。まるで獄。なんて厳しいんだらつ。なんて、なんて。繰り返す。

帰りたいのだろうか。そつじやない。そつじやない。強がるとかではない。ただ綺麗だ。

それが普通に眼前にある。それだけ。昔あつた場所も今ある場所も、ただそれだけ。綺麗で満足で比較できて自由で新しくて、でもただそれだけ、ただあるだけ。静かな部屋で無限の広がりをもつかのような海空光。

一番星のきらめきを田ごとめたとき携帯が鳴った。

20

「わつきは突然電話したりしてすみませんでした」

「いえ」

「彼女？」

「はい」

「彼のことなんですけど、少し気になつて」

「ん」

「彼女なんですね」

「あ、んーどちらかといえばそつでもない方が近いかもしれないんですけど、それが」

オレは旅に出た時の経緯を簡単に話してやつた。

「そうなんですか」

「でも、彼女やばいかも」

急に碎けた話し方になつた。

「私、そんなここ長いわけでもないんだけどいろいろなお客さん来る

でしょ、まあいまはこんなただけだ

「昔はね結構はやつて忙しくて休みほしーつてかんじだつたのよ、信じる?」

返事も聞きもせず沙希だつたかは切り出した。

「で、彼女ぶつちやけ自殺とかしないよね」

正面からガン見された。

丁寧な対応の彼女が気に入つていただけに少し残念だつた。コーヒーを啜つた。ディナー前だから薄めなのか歩いてきたのを考慮して熱々なのか意図しているのか彼女を見ているとわからなくなつた。部屋の趣味、ホテルの調度品、階段の花、彼女ではなくて、オレはこのホテルの秘密めいた奥底についてばかり考えだしていた。

和佐、自殺。何をいつてんだと思つ。

「でも、ほら化粧品とか着替えとかいろいろ聞いて頼んだんならまだ俗世に未練あるというかこれから準備してることにならなければ」

オレは当たり障りのない事を心ない口が勝手にしゃべるに任せた。あの中年のフロントが真のオーナーかなんて推理しながら。

「そんな人が自殺なんてしないっていうんでしょ」

「ねー。もおいいわとにかくあなたの連れなんだから少しは一緒にいて気を使ってあげてください」

最後は敬語だか何だかわからない物言いで終わつた。氣もそぞろなオレとは話にならないと踏んだのだろう。

夕食は何時です。コース料理のみになります。メインは魚か肉選べますがいかがいたしましょう。本日は夜の方他のお客様も来られまして少々にぎやかになるかもれません。

予約席の方1-1番になりますのでお時間までにいらしてくださいますようよろしくお願ひいたします。

「ええ、はい」

うつて変わって仕事モードの嬢に変身した。まだ立ち去らないといふことは、

「少し待つてください」

オレは馬鹿男みたいに携帯を取り出して、出た相手に向かっていきなり夕食が何時からでそれで魚か肉どっちがいいかを聞いた。答えると沙希は愛想笑いをして去つて行つた。制服のエプロンを結んだリボンが片側だけ長くぶらぶらしていた。そいつにつかまつて落ちる機会はどうやら失われたのだろうと彼女に対する推理の締めをくくつた。フロントの中年はそれを見てみぬふりをしていた。それはきっとそうに違いないと思われた。

21

男がバツの悪そうな顔をして戻ってきた。

いきなり肉か魚かなんて、この男なにを考えているのでしょうかと思つた。

「急に悪いね、寝てた？」

うん。としか言えなかつた。

「シャワー使うよ」

勝手に入つて行つた。照れ隠しなのだらう。所作が荒くなつていった。少し男の男を意識した。

食事まで20分、私は今日は眠つてばかりだ。

お腹はすいている。不思議だ。何もしていない。旅行はいつもと違うところにいるだけで消耗すると何かで聞いたがそういうことか。ホームがないのはこの際抜きにして楽しもうといかないところが私の取り柄かな、シャワーの音が聞こえる。突然入つて行つたら驚くだろうか、そういえば男の荷物そのままだ。

そいつをかつさらつて逃げようか。それより今晩は男と一人、テレビもないこの部屋でどうして過ごすのだらう。日が暮れかかつた。乾杯のころには丁度日が落ちるのだらう。

「ねえ」

聞こえないか。

「ねえ

「あー」

「ワインとかあるのかな

「あるんじゃね」

「飲んでいい」

「いいよ」

「一番高いの」

「いいよ」

「最初は白で次は赤」

私はついに扉の前に来ていた。

ドアーハンマーが開いてぶつかりそうになつた。

「いいよ」

男はしげしげ私を眺めていた。どうしたのって感じだらう。

「そろそろ行かないと」

「うん」

「トイレ

「どうぞ」

まだ熱氣あふれるバスルームで化粧をなおして外に出た。男の準備は簡単でもうすっかりできていた。

私が出てくると行こうかとうなづいた。神妙さに感心した。

階段を降りフロントを通り大きなホールに男は入つて行つた。地中海風だらうかナチュラルな白さの木製の机や椅子たちが夕日に染まり、薄いブルーの網目模様のテーブルクロスに対して濃いブルーのナップキン。角にしつけられた白いグランドピアノからドレスを着た女性がぽろんぽろんと音を鳴らしていた。それは曲になりそうでいてそうしないような、場の音楽というかなんというかそういう音楽があるのでらうかわからないがそういう感じだつた。大きめに切りだされ継ぎ目がみえない仕様の窓はみことで眼前に夕日がまさに暮れようとしていた。まぶしさもいとわないが少しさびしい感じがするティナールームだった。奥の方はカウンターがありバーになつ

ていてそこまで夕日が入り込んでいるのがわかつた。

かしこまつて今日何度目かの海を見ているとテーブルの上のグラスに白ワインがそそがれた。かすかな香り漂う波と色のついたそれを飲み干した。静かに始まつた。夕日に見とれていたが徐々に店内には客が入り始めたようだ。しだいにがやがや人の立ち入る音やざわめきが聞こえてきた。夕暮れは早く一瞬で外は青と黒のコントラストに包まれていた。店内の奥の方では小さなキャンドルに明かりがともされているようだつた。やがて窓際の私たちの席にも明かりがもちこまれた。

それを持つてきた男と私の向かいに座つている男は少し知り合ひみたいに何かそつと話しをしていた。何を話していたか気になつたら男と田があつた。説明を求めた。

「あのさ、今日は夜、外、見てござらん。上、ああそつち、月見るでしょもうじき」のランプを消すと田明かりでさ、じいじが夢空間だつてさ」

「ここはその特等席」

それはすごいと思つたが奥のお密さんもみな注目するポイントに置かれているのはちょっとと氣になつた。

「私たちのシルエットを魚に酒を飲む連中がいたら氣にならない。みんなにみられるわけでしょきっと」

男はそれに対する答えを持つていた。

「特等席はもう一つあつて、あのお密さんは何も月夜の明かりに移る一人のカップルを見にわざわざ来てるんじやなくてあのピアノ、月夜に浮かび上がるもう一つのシルエットを眺めに来ているんだと」「オレらは前座にすぎないといつわけなのです」

「ご安心を」

男はワインを傾けた。

確かに隅に置かれたピアノと舞台は全体から皆の視線をあつめることができる。また背に月明かりがはいるであつぽイントも徐々に時間とともに近くなつていくのだらう。

食事が進むにつれ私の足元にムーンライトが忍び寄りグランドピアノのテンポとはまったく違つたりズムで私を侵食してくる。このキラキラが光の集約が白い布をシルクに変え凡庸な顔を魅惑的に変える。今や私の右半分は光に覆われている。光が目に入れども眩しくない。片方が酔つている。私の片方が麻痺している。光のカーテンは流れ皆のキャンドルは消さればろんぱろんとしていた音が止んだ。

私はそれでもよかつた。私は人形の様に動かなかつた。皆がピアノの主に注目していた。

これから始まるのを待つていたが、ここまで数時間に満足だつた。中年のフロント係がバー・カウンターから出てマイクを持ちアナウンスを始めた。今宵も月夜の晩に皆様のご賛同を賜り云々。申し訳なさそうに控えめに、しかしどこからか仕入れてきたスタイルは崩さずにはいさつが終わり、今更ながらピアニストが紹介された。軽いお辞儀をして顔をあげる。40から50近くのきれいな人。少しやせすぎ。すぐに曲に入った。気が高ぶる激情の曲を押さえつける力強さが緊迫感を生む。目を閉じても光のステージは浮かび上がる。音が跳ねる。

曲が終わり一息つくと、止めていた血流を一気に流し込む。流し込ませておいて次は隅々までいきわたせる。あつち、こつち、そつち、どつち。脳が刺激される。時にくすぐられるような愉快。

次は路を奥へ奥へ進んでいく感じ、もういいのにどんどん進んでいく、止まらない。深淵を覗き込む怖さと好奇心。

もう考えない。だれも音を立てない。静かだがこのホールはすごい勢いで飛んでいる飛行機のようだ。方向性は見えない。宇宙を飛び感じだろうか。急に止まつた。トンという音で終わつた。もう終わりつ。首を振つてしまつた。終わり。終わりなの。パニックを意識して表現したくてしようがなかつた。男の目線がそれを抑えた。興奮は内部に浸透しドキドキがとまらなかつた。拍手の中、男に手を取られどこいくのと後ろを振り返りながら

足は駆け出した。音はなつてゐるようなもつならないような。

22

ベットを照らしている。男と女がはいつてくる。男が振り返り女の肩をつかみ強引にキスをした。尻をつかみ胸をつかみ押し倒した。男は今度は優しく女をなでてやる。女はなまめかしく腰をくねらせる。男は明りに照らされた女を一瞬見ただけだ。女は部屋の香りを一瞬意識しただけ。海へ続く道が照らされているのに目を上げようとしない。シーツはもみくちゃにされる。髪が乱れる。服は床に落ちる。部屋は何も変わらない。ただ明るい。

女の顔が見たい。男の顔もだ。男の肩の産毛が反射する。女の爪が滑らかに光る。時折見えるものも見えなくなる、からうじて女の片目に私が映つた。それきり。今夜はそれきり。男があの優しい男がカーテンをしめてしまった。信じられない。

私は悲しんだ。

隣の部屋には女が入ってきた。ドレスを脱ぎ肩を落とし見上げてくる。さらに隣では男が一人日記をかいしているのだろう。男は明りを避けて座っている。酒のグラスに氷だけが輝く。

二人は今宵もそうだ。一人だけが道ずれ。ここ道ずれ。このホテルと私と一人、氷解けるまで。

FIN

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9700g/>

紫光

2010年10月17日23時22分発行